

# 青春スクロール

## 母校群像記

http://t.asahi.com/dnna

### 個性そのままのまま 立ち位置考えた3年間

医療の世界で活躍する慶応高校（塾高）OBたち——。

慶応大学病院長の竹内勤（59、1974年卒）は、慶大生のことこの「日吉の並木道を歩く塾高生は格好いい」という言葉に憧れを抱き、長野市から上京した。いざ入学してみると、ユニ



「学食のカレーライスが好きだった」と振り返る竹内

### 慶応高校 4

ークな教師が多くて驚いたという。英語の試験で授業で習っていない単語が出されたことがあった。試験が終わって同級生に聞くと、それはあるロックグループの歌のタイトルだった。「知識を求める場が広いな、と感じた。先生も生徒も自由だった」と言う。

慶大スポーツ医学研究センター准教授の石田浩之（53、81年卒）は「塾高はいわば『無政府状態』だったが、なぜかバランスの取れた小社会ができていた」と話す。真面目グループに



「学園ドラマを撮り日吉祭で上映したのも思い出」と石田

体育会グループ、落第生グループ……。教師も細かいことには言わず、様々な個性が共存しており、自然と人との接し方を学んだ。「自分の立ち位置をどうするか、無意識に考えていた」。いま五輪代表チームに同行することもあるが、この経験が役立

っているという。

慶大看護医療学部教授の山内慶太（49、85年卒）は「福沢研究会」に所属した。慶応義塾の創始者、福沢諭吉の著書を読み、その解釈などを議論する。「大学の福沢研究者とも親しくできて楽しかった」と言う。2013年に横浜市青葉区に開設された横浜初等部の初代校長も務めた。「福沢先生は情愛に満ちた人。大学生にも年少の塾生にも、温かなまなざしを大切に

していききたい」と話す。米国シアトルでバイオベンチャーを起業した医師の窪田良（48、85年卒）は、失明につながる目の難病「加齢黄斑変性」の飲み薬を開発中だ。入学当時

「製薬は、音楽や映画と同じ世界共通の価値観」と窪田



から「俺は医学部に行く」と宣言していたが、1年の時はとてもそんな成績ではなかったという。その後、勉強に打ち込み、陰で努力もした。体育の成績を上げるために、放課後に鉄棒の蹴上がりや倒立の練習をした。「努力すれば報われる、ということを学んだ。ずっと前に進み続けていきたい」

「ユニケル」などで知られる佐藤製薬社長の佐藤誠一（55、78年卒）はサイクリング部だった。練習では、自転車で塾高のある日吉から長津田（横浜市緑区）まで往復した。帰りは真っ暗。磐梯山の頂上まで数日かけて登ったこともある。「ペダルをこぎ続けることが、まさに自分との闘いだった」。練習がない日は友人と渋谷や自由が丘に繰り出した。「いいことも、そうでないことも、いろいろ経験した。楽しい3年間でした」



「自分の信念を曲げない友人に刺激を受けた」と佐藤